

流域関係者からの意見聴取の結果について

No.	意見聴取の場	流域治水	水利用	流域環境	備考
1	上流圏域会議	<ul style="list-style-type: none"> ・気候変動に伴う降雨量の増加により、河川氾濫等による浸水被害が頻発。特に、令和2年7月豪雨では大きな水害が発生。 ・斜面崩壊や山林の管理不足等に伴う流木により、橋梁の閉塞が発生。 ・河川氾濫等に伴う浸水被害が発生しているため、河川整備の推進が必要。 ・<u>気候変動に伴う降雨量が増加しているため、既設ダムの有効活用、洪水調節施設の整備が必要。</u> ・既設ダムの有効活用として、松木ダムでも事前放流等の必要性を感じているが、農業用ダムであることから、用水確保も必要であり、調整が難しいと感じている。 ・<u>斜面崩壊や山林の管理不足等に伴い、流木による橋梁閉塞が発生しているため、砂防事業や山林管理が必要。</u> ・高齢化するなかでの水防団の人材確保。 ・特定都市河川の指定に伴う財政支援。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>河川に水が流れていない箇所があり、数日続いた。</u> ・<u>農業関係者の取組みにより現時点で濁水は大きな問題となっていないが、水不足は発生している。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然環境に配慮した河川整備が必要。 ・良好な河川環境の維持が重要。 ・<u>松原ダム、下釜ダム、夜明ダムでの水質改善が必要。</u> ・<u>かわまづくりの推進が必要。</u> 	<p>日時： 令和7年10月14日 場所： 九重町役場</p>
2	中流圏域会議	<ul style="list-style-type: none"> ・筑後川本川の水位が高いと、排水できずに内水被害が発生。本川の水位を下げる対策が必要。 ・<u>筑後川本川の水位を下げるため、既設ダム（朝倉3ダム等）の治水機能の増強、新規洪水調節施設の整備が必要。</u> ・水害の激甚化・頻発化するなかで、治水対策等が必要。 ・H29年九州北部豪雨以降、土砂が堆積しているため、浚渫が必要。 ・支川の水位を下げるための対策が必要。 ・流域治水として流出抑制対策の推進が必要。 ・流域治水の取組みとして、事前放流や田んぼダム等の実施が必要。 ・<u>流域治水を推進する上で、上下流での協力や幅広い周知が必要。</u> ・森林整備・管理による流出抑制、保水が重要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>気候変動の影響を踏まえて、濁水対策容量の活用の検討が必要。</u> ・<u>既存ダムの活用や機能向上の検討が必要。</u> ・上流・中流・下流も含めた利水機能の充実。 ・<u>朝倉3ダムや中流域のダムを活用したカーボンニュートラルへの寄与。</u> ・自己水源に乏しく、筑後川の水に感謝。ダムが整備され、水の安定供給につながっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境整備された箇所の維持管理が課題。 ・河川敷の公園は、河川水位が上がると土砂が堆積するため、維持管理しやすい形にしていきたい。 ・川づくりに際して視点場を意識してほしい。 ・<u>教育面として、大石堰や山田堰は学生に利用されている。</u> ・<u>川を利用したイベントは、子供が川に親しむ良い機会と考えている。</u> ・水でのつながりに着目した取り組みを実施している。キャンプ場やバイクの練習場を整備している。 ・<u>冬場の環境用水の適切な補給が必要。</u> 	<p>日時： 令和7年10月21日 場所： 久留米リサーチパーク</p>

流域関係者からの意見聴取の結果について

No.	意見聴取の場	流域治水	水利用	流域環境	備考
3	下流圏域会議	<ul style="list-style-type: none"> ・気候変動の影響に伴う豪雨の頻発化・激甚化を顕著に感じている。 ・近年、内水被害が頻発化。筑後川本川の水位が高いと排水できずに内水氾濫が発生。 ・筑後川下流右岸地域は内水氾濫の常襲地帯となっており、R3.8出水では内水氾濫による浸水被害が発生。 ・R5出水において、城原川では既往最高水位を記録し、野越から越水、排水ポンプも5時間に渡り停止し、家屋浸水が発生。 ・筑後川下流域は有明海の干満の影響を受けやすく、高潮で内水排除が困難となり浸水被害が発生。 ・<u>筑後川本川の水位が下げる対策として、既設ダムの有効活用、新規洪水調節施設の整備、河道掘削等が必要。</u> ・城原川ではR5出水で、既往最高水位を記録し野越から越水しており、治水対策として城原川ダムの整備及び治水機能の向上と河道整備が必要。 ・<u>内水対策として、巨勢川調整池及び佐賀導水路の改良、排水機場の新設・増強、調整池の整備が必要。</u> ・<u>内水対策の計画策定・見直しによる流域治水対策の推進。</u> ・市町間の連携による流域治水の推進。 ・クリークの事前排水、田んぼダム、堰操作による流域治水対策の推進。 ・特定都市河川の指定に向けた検討。 ・流域治水の理解を深めるため、対策をPRする取り組みが必要。 ・防災ダムの容量が不足していると認識しており、拡張等ができないか検討している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>クリークの事前排水が空振りした際に、充水する体制構築が必要。</u> ・筑後川の全体の水利用を考えることが必要。 ・<u>気候に伴う極端化に備えて、総合水管理としてダムの統合運用も重要な施策となる。新規の施設計画や既存施設の管理運用の柔軟な見直しが流域の課題解決につながる。</u> ・ダムを活用した水力発電はカーボンニュートラルに寄与する重要な手段の一つ。 ・渇水の前段階で貯留する対策を実施するが、水質の悪化が懸念。 ・<u>上・下水等施設等の老朽化が進んでおり、地震等で被災する可能性があるなかで、バックアップの水源確保が必要。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>環境用水の適切な補給が必要。</u> ・ノリの栄養源としては、筑後川からの流入が一番大きく、水の補給（窒素・リン）が必要。有明海の水質保全のため、窒素とリンを供給する季節別運用を行っている。 ・<u>有明海や干潟を保全するため、山・川・海の一体的な取組みを継続していくことが必要。</u> ・<u>砂が川から来ないから貝が育たず、魚も育たない。</u> ・ゴミ流出の抑制、物を捨てない意識付けが必要。マイクロプラスチックの流出による環境問題もある。 ・川まちづくり実施後の支援体制が必要。 	<p>日時： 令和7年10月21日 場所： 久留米リサーチパーク</p>

流域関係者からの意見聴取の結果について

No.	意見聴取の場	流域治水	水利用	流域環境	備考
4	農業関係者 アンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> 大雨・洪水の事前察知や迅速な止水対応が課題。 山林からの流水などもあり溢水し、水路崩壊や水路脇の法面崩壊などがここ数年で発生。河川流域にも不安要素があり懸念事項。 洪水被害の対策として、筑後川の浚渫を行ってほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 農家の減少や高齢化が進展している。 降雨形態の二極化（大雨の激甚化、渇水の頻発化等）に伴う渇水発生頻度増大や渇水発生による水利用の不安定化が心配。 洪水後の取水口または堰における土砂・流木の堆積により取水困難。 高温、無降雨、洪水による作物が出来にくい環境変化になってきている。 営農の作付変化に伴う水需要（時期）の変化が生じている。 稲が最も水を必要とする出穂期に水が不足している。 渇水時にも安定した水利用ができる施設の整備・運用。 現状施設の能力が十分に発揮できるように、水路など施設の老朽化・耐震化への対策。 	<ul style="list-style-type: none"> クリークの水質改善のために、環境用水の確保が必要。 	<p>日時： 令和7年10月～11月 方法： 郵送</p>
5	筑後川農業関係者 意見交換会	<ul style="list-style-type: none"> クリーク先行排水は、地域住民からも期待。 クリークの先行排水は、農業だけでなく、地域の住民からも期待されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 水関係の調整もなく、稲の増産に入ることについて、困っている。行政サイドは、現場では水が足りないという状況をしっかり理解して欲しい。 水田・畑を持続的に保つために、流域での連携が必要。 後継者確保に関し、例えば、退職者が地元へ戻るような政策を地域行政が進めることで、より良くなるのではないか。 河川内の堆積土砂は、全体的な撤去が必要。（局所的な対応ではどうにもならない） 山林保全に伴う、渓流水の維持が重要。 クリークは非常に有意義に水を利用できるものと考えている。 クリークの先行排水は、農業だけでなく、地域の住民からも期待されている。空振った場合の、早期の水位回復が農家の信頼を得るものと考えている。 水が必要な時に使える水がないことが一番の課題。利水施設（6施設）の統合運用の活用を望む。 意欲をもって新規就農されている方もおられ、用水の確保について意見を受けている。不特定用水の確保をぜひともお願いしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の方々のご協力もあり、歴史的な施設（山田堰、大石堰等）を後世に残すという意味でも、施設の維持管理ができています。 	<p>日時： 令和7年12月2日 場所： 筑後川河川事務所</p>
6	漁業者 意見交換会	<ul style="list-style-type: none"> 災害などに伴う河川への流出土砂の堆積問題。 出水による流木等の回収など、迅速な初期対応の重要性。 	<ul style="list-style-type: none"> ダム湖内に堆積した有機質土砂が放流により河川に流出することで河川の濁り、悪臭、河床への堆積問題が生じ生態系が変化しつつある。 発電ダム放流による河川の濁り。 土砂堆積により河川が浅くなり、船舶の航行困難、漁業活動に支障が生じている 	<ul style="list-style-type: none"> 川から石材を持ち出さない川づくり。河川整備の際に持ち出した石材は河川整備後に戻してもらいたい。 河川への土砂堆積による船舶航行の困難。 所有者不明の不法係留、放置船舶の撤去。 ガタ土除去船の老朽化に伴う機能低下を懸念。 	<p>日時： 令和7年9月2日 場所： 久留米市内</p>

流域関係者からの意見聴取の結果について

No.	意見聴取の場	流域治水	水利用	流域環境	備考
7	漁業関係 ヒアリング	<ul style="list-style-type: none"> ・保水力確保のために山林の保全の必要性を感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・魚道が本来の機能を発揮し、魚が行き来するためには安定した河川流量が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・河川整備に伴って石が撤去されたことで、アユが少なくなっている。 ・餌となる苔が生える素地としても、天敵から身を隠す場所としても魚が生息するのに石が必要。 ・植林されていない山間部からの濁り水が通年的に河川を濁らせている 	<p>意見交換会に含まれていない玖珠郡漁協、小国漁協について個別に意見聴取を実施</p>
8	水道事業者 ヒアリング	<ul style="list-style-type: none"> ・洪水による取水施設への影響（閉塞・破壊等）を懸念。 ・嵩上げなどの内水被害に対する対応が必要。 ・洪水については、本川水位を下げるのが重要と認識。 	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の老朽化や耐震化の対策は喫緊の課題。 ・対策を計画的に進めるために必要な予算面や人材面等の問題がある。 ・限られた財源でどのように経営していくかが課題。 ・経営の広域化は、大変有効的な形と考える。 ・技術者の育成、技術者不足が深刻な課題。 ・技術の継承をいかに行っていくか。 ・土砂堆積による取水困難を懸念。 ・配管内に土砂等が溜まることにより維持管理の負担増。 ・利水施設の効果的かつ効率的な統合運用を強く望む。 (6施設) ・高頻度で濁水調整を伴う濁水が発生し、取水の不安定化を懸念。 ・筑後川水系ダム群連携事業の（計画的な）推進を強く望む。 ・今年は夏に全く降らず、まさに極端な気象状況が体现された。 ・濁水へ何とか対応するため、河川等の情報について、共有や公開などの環境整備を望む。 ・気象予測の精度向上に伴う非洪水期等における洪水調節容量の活用。 ・洪水発生により職員が通勤できずに操業を止めざるを得ない事態の発生などを懸念。 ・気候変動の影響に伴う、水処理の薬品使用量の増加や供給水質の不安定化を懸念。 ・H29豪雨以降、本川水質（濁度）の悪化が続いていることを懸念。 ・水道事業者としては水質が一番の懸念点。 ・ダム湖内（利水容量内）の堆積土砂の撤去が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・筑後川の恵みと水のありがたみを感じるための、環境学習の機会が必要。 	<p>日時： 令和7年11月19日 ～12月15日 場所： 各ヒアリング先</p>

流域関係者からの意見聴取の結果について

No.	意見聴取の場	流域治水	水利用	流域環境	備考
9	河川工事環境 検討会(学識者)	—	—	<p>■筑後川下流部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・縦断的に塩分濃度が高い区間や低い区間があることも重要。 ・地盤高の多様性、塩分濃度の多様性を確保するという視点があると良い。 ・筑後川下流部では、塩沼植物帯とヨシ原の保全と再生、樹林帯からヨシ原へと連続する陸側のエコトーンが、生物にとって重要。 <p>■筑後川中流部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・筑後川中流部は、フンドを創ることで生物多様性の確保が可能となるため、積極的にフンドを掘って貰いたい。 ・支川や横断方向の連続性（生態系ネットワーク）のことを考慮した方が良い。 <p>■筑後川上流部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上流部の環境特性として、日田市街部は中流域的な環境であることから、大山川などの溪流環境を追加した方が良い。 ・大山川などの溪流環境の整備イメージとしては、指標となるカジカガエルが生息できるような川と森が連続している溪流環境の保全・再生が必要。 <p>■目標設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>河川整備計画などにおいては、定量目標とは別に「ヤベカワモチが生息できる環境の創出」など、定性的な目標を設定するとよいと思う。九州オリジナルの高い目標を設定すると良いと思う。</u> <p>■対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海と川を行き来するニホンウナギ、ヤマノカミ、アユの生活を保全・再生するメニューがあった方が望ましい。 ・水際の植生帯や石の裏には、貴重な水生昆虫が生息しているため、水際を残した掘り方が重要。 ・<u>自然体験を通じた自然観の醸成という観点が必要。</u> ・<u>本川だけでなく支川の自然環境の再生や創出も重要。</u> ・<u>縦断的連続性だけでなく、横断的連続性も重要。</u> 	<p>日時： 令和7年8月4日 令和7年12月16日 場所： 筑後川河川事務所</p>

流域関係者からの意見聴取の結果について

No.	意見聴取の場	流域治水	水利用	流域環境	備考
10	筑後川・矢部川 圏域会議 (河川協力団体)	—	—	<ul style="list-style-type: none"> 昔は、オヤニラミやホタルがいて、ウナギやアサリが捕れていた。 河川を利用しやすいエリアとエコトーン(湿地)のエリア等の区分けが必要と思う。 筑後川上流(大山川)は、この50年で生活様式が変わり、川の石が藻で“ヌルヌル”になった。 筑後川全体で川を盛り上げていく必要があると思う。 昔は水遊び場として賑やかだった。 昔は、人や物を運搬する“筑後川渡し”が行われおり、宮ノ陣付近ではボートで遊ぶ人もいた。 筑後川周辺には大きい寺院等も多い。 災害復旧には、行政と地元の間に関川協力団体等が入った方が柔軟に対応できる。 	日時： 令和7年8月21日 令和7年12月11日 場所： 筑後川河川事務所
11	自治体向けの 観光等に関する アンケート調査	—	—	<ul style="list-style-type: none"> 自然環境と景観は観光資源として保全が必要。 川を活かした住民活動支援が必要。 	日時： 令和7年10月～11月 方法： WEBまたはFAX